

わかる！ 泌尿器生殖器—画像診断の要点

B Hamm, P Asbach, D Beyersdorff, P Hein, U Lemke

山下康行 監訳

＜書評者＞ 鳴海善文（大阪医科大学放射線医学教室教授）

本書はベルリンの Charité 病院放射線科の Hamm 教授とそのグループの著書を熊本大学の山下康行教授が監訳したものである。Hamm 教授も山下教授もドイツと日本の放射線学会の泌尿生殖器領域で大変活躍されており、この本も症例がよく吟味されており、監訳も適切なものとなっている。

本書の特徴は、そのタイトルどおり要点を的確に押さえた非常にわかりやすい内容にある。構成は第1章が「腎、副腎」、第2章が「尿路」、第3章が「男性生殖器」、第4章が「女性生殖器」と、泌尿生殖器領域のなかでも産婦人科領域よりむしろ泌尿器科領域に重点が置かれた内容になっている。

内容は、日常臨床で比較的良好に目にする重要な疾患が簡潔な箇条書きでまとめられており、疾患に

応じてその病因、疫学、豊富な画像と画像所見、臨床事項、鑑別診断、診断のポイントとピットフォール、数編の参考文献が記載されている。各疾患の臨床事項に「臨床医に何を伝えるか？」の項目があり、臨床医に伝えるべき情報が簡潔に書かれている。例えば、「膀胱腫瘍」の項目では腫瘍の部位、壁浸潤の深さ、膀胱を越えた腫瘍の範囲、リンパ節腫大、腎盂尿管病変の有無など、いずれもカンファレンスなどで言及すべき必要不可欠なポイントがあげられている。また、各項目の最後に鑑別疾患を表示し、鑑別点が短い言葉で簡潔に記載されている。

本書に掲載された画像は全体的に質が高く、各疾患に応じた画像の選択も適切である。CT、MRI、超音波などの断層画像が多くを占

めるが、症例に応じて経静脈性尿路造影や膀胱尿道造影も選択され、放射線科医、泌尿器科医両者に役立つ内容になっている。また、本書の巻頭に必要最小限の略語が記載され、初学者にも親切であり、巻末には必要最小限の和欧文の索引が掲載されており病名・病態からの参照にも役立つ。

本書を使用する場面は2つ想定できる。まず、後期研修医の専門医試験の準備に役立つことは間違いない。さらに専門医が日常臨床で分厚い本や文献をひもとく時間のないときの記憶の確認にも最適である。

このコンパクトな訳書『わかる！泌尿生殖器画像診断の要点』を研修医のみならず泌尿生殖器領域の画像診断に携わる専門医にもお薦めする。

●23 cm 頁 285 2010 年

定価 5,880 円

(本体 5,600 円＋税 5%)

[ISBN978-4-89592-623-2]

メディカル・サイエンス・インターナショナル 刊